



# 建設の幻獣3 河童など

なぜ、尻を食えと言ったのでしょうか。もしかすると「そんなこと知るか糞くらえ」のような捨て台詞だったのかもしれない。

## 井伏鱒二の河童

『旅と伝説』の昭和3年11月号には、河童が関東平野を造成した話があります。作家の井伏鱒二による報告で、「落合の河童」という落語のような話ですが、一応「公事手控唄」という出典も挙げて

いるので、彼の創作ということでもないようです。

「元龜二年(1571)の春から七月にかけて、毎日大雨が降り続き、江戸の北方五里の落合村は水の底に沈んでしまった。その頃の関東平野は、まったく平坦な土地だったので落合村だけではなく、平野全体が沈没したのだ。

落合村の下落合に、佐貫坊という修験者があり、洪水をなんとかするため、計を案じ、洪水の波打っている渚にでて、



河童(当館職員 上原由子画)

尻をまくつて座っていた。すると、佐貫坊の尻を狙つて、河童が現れた。佐貫坊は、すばやく皿の水を払つてしまひ、河童を捕まえた。佐貫坊は河童をいろいろと問いただし、人魚に惚



常堅寺のこま犬は河童のように頭にくぼみがあり賽銭がおかれている(2010年撮影)



岩手県遠野 有名な常堅寺のこま犬は河童のように頭にくぼみがあり賽銭がおかれている(2010年撮影)

さて、この「盆過ぎメドチ談」には、河童の起源譚が紹介されています。「昔左甚五郎が某地の仏閣を建立した折に、大工の手が足らぬので人形を多く作りこれに気を吹き込んで働かせた後川に捨てた。それが川童になって今でもいるのだ」

神野善治氏の『木霊論』によれば、このような説話は西日本に多く、全国で30ほどの事例があり、大工は左甚五郎の他に「飛騨の甚五郎」や「竹田の番匠」など。また、河童が尻子玉を抜くようになったのは、大工が藁人形を川へ捨てようとする時、人形が「これから何を食つたらよかるう」というので、「人間の尻を食え」と答えたからとのこと。

「胸がどぎどぎいたします」

河童は急いで仕事にかかり、二、三日の内に洪水は引いてしまった。そして、水が乾いたあとには、縦横に谷が出来ていた。水を速やかに流すため、河童が掘つたに違ひなかった。こうして関東平野はここぼことした平野となった」

## 河童の正体

さて、このような河童の正体は、いかなるものなのでしょう。昔は日本各地に生息していたカワウソウという説もあれば、いや猿だの、スッポンだの、川の渦だの、拳句の果ては山に逃げ込んで布教活動を続けた宣教師だのと、いろいろと言ひ分があり、これといった定説はないようです。ただ、現在確認できる史料の中で、河童という言葉が初出する室町時代の辞典『下学集』(1444年序)には、カワウソウの項に「老而成河童者」とあり、つまり年を経たカワウソウが河童になると考えられていたことがわかります。

You Tubeなどの動画で見ると実際のカワウソウの行動は、相撲を取るように仲間とじゃれついたり、頭だけ水から出して周囲をうかがったり、三、四歳児が立つたように見えたり、河童のそれと当てはまる部分があります。

また、河童は全国各地に分布しており、それぞれの土地でガタロやカシヤンボやメドチなどと、実に多様な名称がつけられていることから、まったくの想像の産物だったとは思えません。そうしたことをふまえて、私の考えとしては最初期に

おける河童のモデルはカワウソウであり、おそらく河童とカワウソウは同義語に近かったのではないかと考えています。

## セコ子

河童の類縁のような妖怪たちもご紹介しましょう。一つ目は「セコ子」です。なぜか大工道具を欲しがります。柳田國男の『妖怪談義』から紹介しましょう。

「石川日観・石川泰恵二人の話を集めたゆえに『観恵交話』と題してある一書にも、いずれの地方のことかまだ知らぬが次のような一条がある。曰く、左衛門佐殿領分の山にセコ子という者がいる。三、四尺ほどにて眼は顔の真ん中に一つある。その他は人と同じだ。何も身に着けず、毛もない。二、三十ずつほど連れ立って歩く。これに出会っても特に害はないが、大工の墨壺を欲しがります。しかし、与えると良からぬことがおこるのでやらないのだと和太ちが語った。言葉は聞かえず、声はヒウヒウと高く響く」

この話にある「左衛門佐領分」とは、おそらく有馬左衛門佐康純の領分の意味で、日高国延岡領を指すものと思われま

## ヤマワロ

さて、セコ子の話に続き『観恵交話』には次のような話があります。「同領分(セコ子と同じ左衛門佐領のこと)にやまわろというもの有。セコ子より細くして背は高く是は多くは出ず走り罷り出るよし也」ヤマワロは「山童」と書き、四、五歳くらいの大ききで全身に毛があり、後ろ足



山わらう(山童) (出典:佐藤嵩之『百怪図巻』より。ウィキペディアより転載)

で立つて歩きます。非常に長い手は河童と同じように左右繋がっており、右を伸ばすと左が縮まると言います。ヤマワロは川に入ると河童になると言ひ、春の彼岸に川に入つて、秋の彼岸には山に帰るなど、入れ替わる日は地方によつて異なりますが、暖かくなり田畑の農耕が始まる時期になると川に入るようです。ヤマワロは山の神であるとともに、田の神とも考えられているからでしょう。熊本出身の民俗学者であった丸山学は、「河童の丸山先生」と称された人物で、故郷熊本におけるヤマワロ伝承について詳細に調べ、「山童伝承」としてまとめました。

ヤマワロは歌が好きで、人間が山で歌うとすぐに覚えてしまい、その晩にはヤマワロが同じ歌を歌っているのが聞こえるそうです。そのようなまね好きからか、ダイナマイトの音までもまねしてしまふとか。丸山が球磨郡五木村で採集した話からご紹介しましょう。

「ヤマワロは夏の間、山の中を一定のところを群居していて、木を倒したり、木流しの音をさせたり、土工のマイトの音まで真似をする。今この奥地に多くの

土工が入り込んで発電所工事をやっているが、土工たちはヤマワロがマイトの音をさせるのをきくと、ヤマワロが加勢してくれるといつて悦ぶそうである」

ところで、ヤマワロは五家荘や球磨郡五木村ではセコ(背子)とも呼ばれています。これは尊称らしく、ヤマワロと面と向かつた場合にはそのように呼ばなければ腹を立てるのだそうです。

つまり、延岡のセコと熊本のヤマワロは同一のものを指し、こうした妖怪の話は九州の山々で伐木などの仕事をした山師と呼ばれる人々が、山を渡つて歩くうちに残っていたものだとして、丸山は「山童伝承」の中で推測しています。

ちなみに、セコ子は墨壺を欲しがると紹介しましたが、ヤマワロは苦手としているようです。

「キコリは墨壺を持つていると安心である。自分の仕事場のまわりに墨をうっておけばヤマワロは決してその中に入つて来ないものである。(昭和二十六年九月於八代郡河俣村)」

「五家荘一帯の山には土佐から大勢の山師が来ていたが、この人たちがよくセコの話をした。モトヤマ(山師の仕事の分担で伐木作業のこと)師はみな墨壺を持つているので、その墨糸を山小屋に張まわしておいたらセコがワザをしに来ないと言つていた。(昭和二十七年 於柿迫村)」

延岡と熊本でセコの嗜好に差が生じるのは話を残した山師の集団の違いや、それぞれの土地で語られるうちに差異が生じたなど、そのようなことが原因だと思ひます。

(文:江口知秀)